日下川中小河川改修工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

１９８１年３月

高　知　県　教　育　委　員　会

序

日下経塚・本郷遺跡の発掘調査は，日下川中小河川改修に伴う調査として，高知県土木部河川課をはじめとする開発関係各機関との協議の結果実施することとなったものです。

本発掘調査においては，本郷遺跡から古代の人々の生活の一端を知る資料を得ることができました。悪い自然環境にかかわらず，その時代に生活した人達の姿が思い浮かばれます。

本書は，調査の概要をまとめたものですが，各方面において御活用いただければ幸いです。

最後に，発掘調査において終始御協力いただきました日高村教育委員会をはじめ高知県土木部河川課・高知県伊野土木事務所の各位，地元日高村の皆様方に厚く御礼申しあげます。

昭和56年３月31日

高知県教育委員会
教育長　上　田　照　成

例　言

1．本書は，高知県土木部の依頼により高知県教育委員会が実施した日下川中小河川改修工事に伴う埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書である。

2．対象地は，高岡郡日高村本郷本の畑所在・日下経塚と同村本郷吉池所在・本郷遺跡である。

3．発掘調査は，昭和56年２月３日から２月10日までと，２月22日から３月12日までの間に実施し，高知県教育委員会文化振興課主事山本哲也が担当した。

4．調査にあたっては，高知県土木部河川課・同伊野土木事務所・日高村教育委員会の全面的な協力をうけたほか，発掘作業の実施においては，下記の方々の協力をいただいた。厚く感謝の意を表したい。（敬称略）

日高村教育委員会　教育長　吉岡　了
日高村教育委員会　教育次長　前田忠雄
（現地作業）有限会社西本建設・吉岡土建
合田茂伸（関西大学考古学研究室）

5．本報告書の執筆・編集は山本が行い，報告書作成にあたっては，小谷芙美子・村井真利子・秋山江美の協力を得た。

目　次

本文目次

Ⅰ　遺跡の位置と環境……1
Ⅱ　調査に至る経過……2
Ⅲ　調査の経過……2
Ⅳ　調査の内容……4
Ⅴ　小結……12

図版目次

1　日下経塚調査地点
2　第1トレンチの状況
3　第2トレンチの状況
4　第3トレンチの状況
5　第4トレンチの状況
6　本郷遺跡調査風景・遺物出土状況
7　遺物出土状態（青磁・須恵器）
8　調査風景
9　本郷遺跡調査地点層序
10　層序と遺物出土状況
11　出土遺物（弥生土器）

Ⅰ　遺跡の位置と環境

日下経塚・本郷遺跡の所在する高岡郡日高村は，高知県のほぼ中央部に属して面積44.5km²を有する主として農産業の盛んな村である。

村の北境に接して南流する県下三大河川のひとつ仁淀川は，日高村小村の付近で支流日下川と合流しており，この日下川に沿って形成された沖積平野が東西に広がっている。

日下経塚・本郷遺跡は，ともに日下川の改修工事の際に遺物の出土から知られることとなった遺跡であり，現日下川の河岸に位置している。（図１）

日下経塚については，かって湖州鏡が出土したことが報ぜられている(1)。鎌倉時代の経塚(2)であったことが考えられている他は，経塚の位置・内容等について具体的な資料に乏しい。

本郷遺跡は，昭和８年～９年に実施された河川改修の際に発見され，弥生後期土器片・石庖丁などの出土があった(3)。

日高村における弥生時代の遺跡としては，本郷遺跡の他に同村下分西田口遺跡があり，弥生後期に属する土器片が採集されている(4)。

また，小村に所在する小村神社には，中広形銅鉾が二本伝世し，加えて神社の御神体として古墳時代後期の金銅荘環頭大刀(5)（重要文化財）が伝えられている。

註 (1)　寺西正路「支那銅器時代考材料」『東京人類学会雑誌第８巻第83号』1893年２月

(2)　岡本健児「第三節・鎌倉時代－経塚の築造－」『高知県史・考古編』

(3)･(4)岡本健児「第三章・弥生時代」『高知県史・考古編』1968年２月・『高知県の考古学』1966年３月

(5)　浜田晃僖「金銅荘環頭大刀」『高知県百科事典』1976年６月・高知新聞社

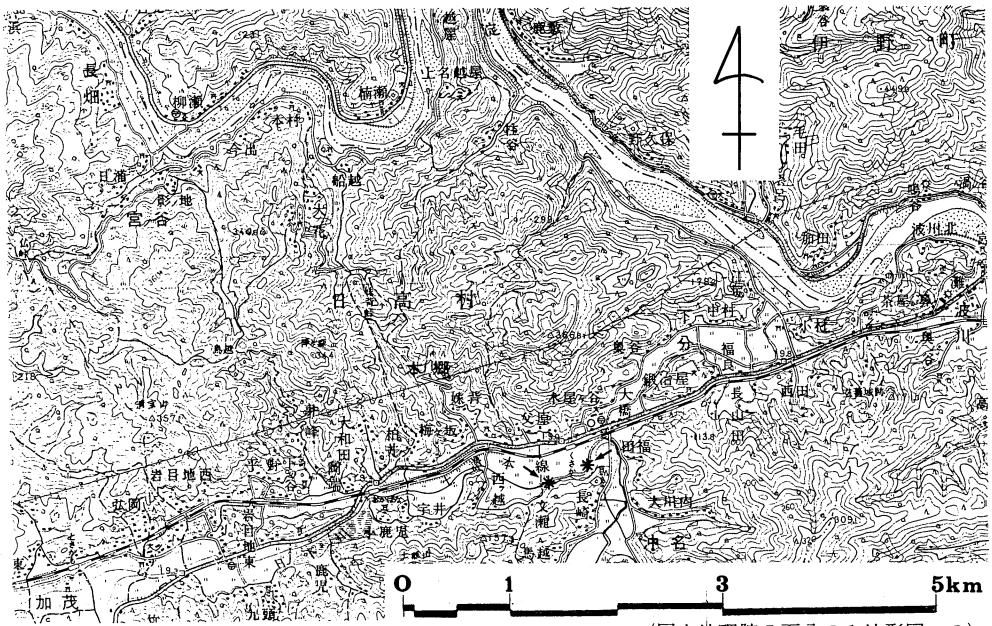


図１　遺跡の位置　（国土地理院５万分の１地形図いの ＮＩ－53－28－11（高知11号））

II　調査に至る経過

日高村内を東西に横断して流れる日下川は，流域面積38km²をもち，静かな農村地帯の風情を醸しだしているものの，ひと度災害時になると例年のように甚大な被害を与えている。特に，昭和50年の台風５号災害・昭和51年における台風17号災害においては全村的な規模において自然の猛威がふるわれ著しい被害を被った。

こうした結果から，昭和52年より国の激甚災害対策特別緊急整備事業（放水トンネル設置事業）が着手され，またそれと併行して，内水被害対策のための総合治水事業・基盤整備事業が進行しつつある。

高知県土木部においては，昭和55年度より日下川中小河川改修工事の計画を策定し，出水に備えた改修工事の実施によって治水対策を実施する運びとなった。

高知県土木部河川課との連絡調整のなかで，工事区域内における周知の埋蔵文化財包蔵地である日下経塚・本郷遺跡の事前発掘調査が必要となり，今回の調査の実施に至った。

III　調査の経過

日下経塚

日下経塚については，昭和56年２月３日から２月10日までの間に発掘調査を実施した。発掘調査の対象地は，高岡郡日高村本郷本の畑 354 ～ 1 ・ 354 ～ 2 である。（図２）

調査地においては，遺跡の性格上任意にトレンチを設定し（計４ヶ所・発掘総面積150m²）主として機械力を導入して遺跡の確認に努めたが，従前より遺跡所在地として比定されていた調査地点においては，遺物包含層・遺構・遺物等の検出はまったく確認できなかった。

調査時において，日下経塚に関連する確認ができなかったため，さらに当該調査地周辺における河川改修工事（河川拡幅・護岸工事）に立会ったが，やはり遺物等の散布も見られず，経塚関連の所在確認をすることはできなかった。

本郷遺跡（図３）

発掘調査は，昭和56年２月22日から３月12日までの間に実施した。調査対象地は，高岡郡日高村本郷3464（字ヨシイケの一部）であり，発掘総面積は約100 m²である。

調査は，機械力により耕作土（表土）等の除去をした後，主として人力により遺物・遺構の確認に努めた。調査の結果，遺構等の存在はない二次堆積による遺物の包含層が確認された。遺物の属する時代は，弥生時代後期・古墳時代後期・平安～鎌倉・室町時代といった具合に各時代にまたがっており，主として弥生後期・古墳時代後期の遺物の量が多かった。遺物の全体量としては，コンテナ（内法・34cm×54cm）一箱分程度であった。

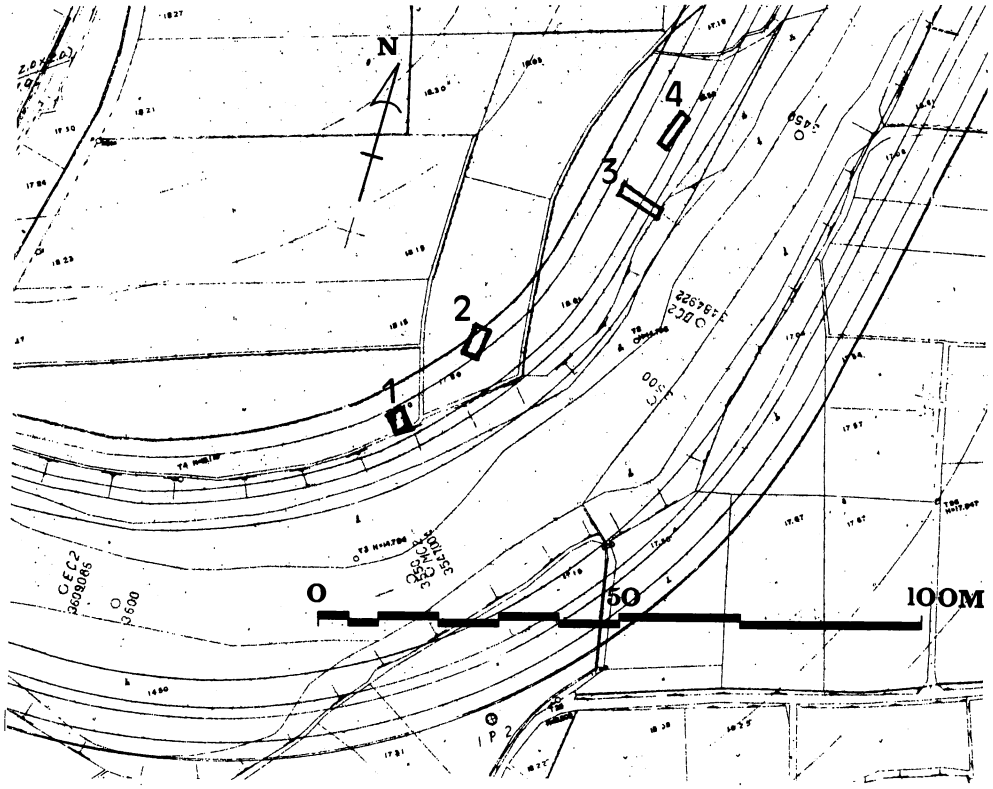


図 2　日下経塚発掘調査地点

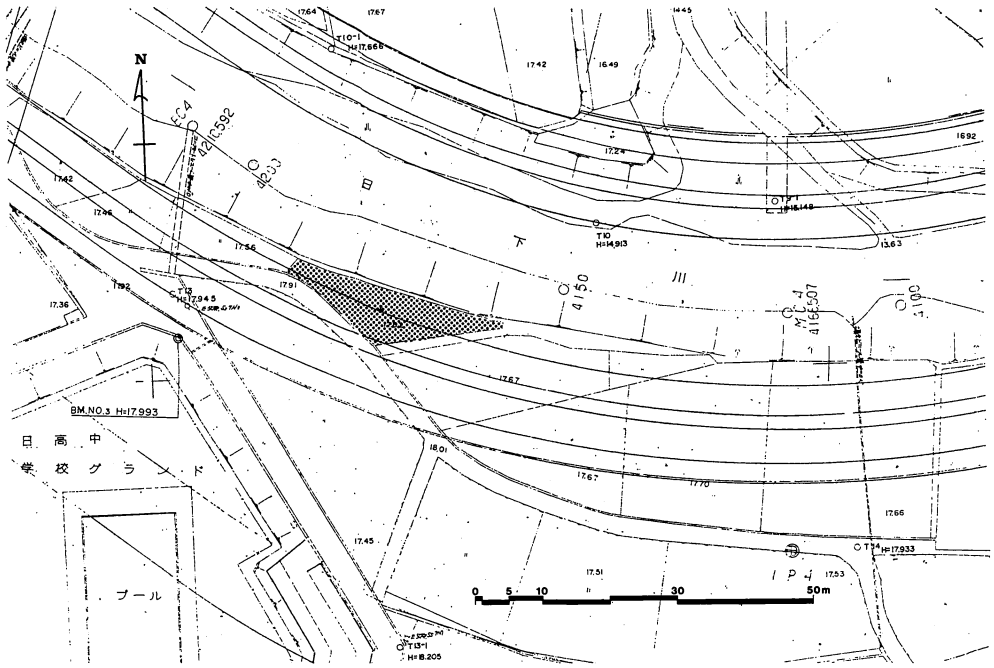


図 3　本郷遺跡発掘調査地点

Ⅳ　調査の内容

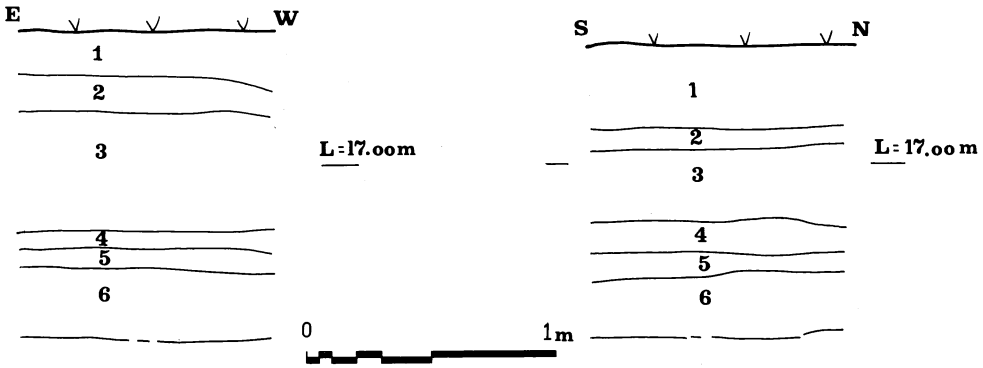


図4　本郷遺跡調査地点の層位

今回の調査発掘のなかで，遺物包含層の存在が確認されたのは，本郷遺跡においてであった。

日下経塚については，経塚関連の遺物出土地点とみなされる箇所周辺において確認調査を実施したが，その存在を明確にする遺物・遺構等を検出することはできなかった。経塚に伴う盛り土・土地の地割り（土地利用のなかで耕作地と区別される範囲）などは，現在の景観のなかにおいて全く認めることはできず，遺跡の現状確認をなすことを著しく困難な条件にしている。

日下経塚確認のために設定した調査区においても，遺物の包含のない自然堆積層が層序をなしており，遺構の存在もなかった。当地点における人間の営みの痕跡を認めることはできず，土地利用において長期間にわたる活動がなされたとは考えがたい状況を呈していた。むしろ，現代以前の土地のありかたとしては，居住地・居住地周辺以外の空間であった可能性が強い。

次に，若干ではあるものの遺物の包含が認められた本郷遺跡における調査概要について述べることにする。

本郷遺跡

発掘調査地点における基本的層序は，表土層以下6層に区分される。（図4）

Ⅰ層は表土層であり，暗褐色腐触土層である。Ⅱ層は耕作土で，灰茶色粘質土層。Ⅲ層は，淡茶灰色粘質土層。Ⅳ層は茶褐色粘質土層で，Ⅴ層は淡茶灰色粘質土層，Ⅵ層は地山層であり，茶褐色粘質土層である。

遺物はⅡ層～Ⅴ層まで包含され，Ⅵ層では無遺物層となっている。各層において，特定の時代の遺物しか含まない層はなく，遺物は混合した状態で検出された。そのなかで，Ⅱ層～Ⅳ層では弥生時代後期～平安・鎌倉・室町時代の遺物が混在しているが、Ⅴ層では弥生時代

後期・古墳時代後期の遺物しか包含されていなかった。

II層（耕作土）より下に堆積するIII～V層は，いづれも軟弱な堆積状況を呈しており，別の地点から流失して堆積した二次堆積土であると考えられる。出土する遺物の混在状態からみれば，II～IV層とV層との間で相違がみられるので，二次堆積の状況にIV層・V層間で時間的な隔りが認められる。従って，V層は，古墳時代後期～平安時代以前の間に堆積した二次堆積土であると考えることもできる。

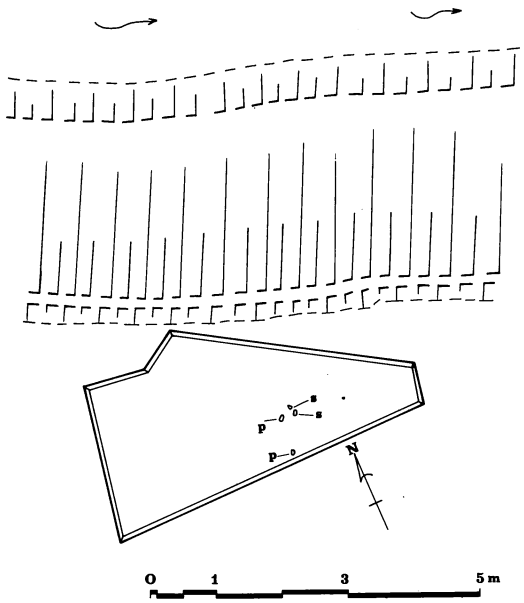


図5　本郷遺跡調査地点・遺物出土状況

発掘調査地点は，標高17.50 m前後の耕作地（水田）であり，その北側には現日下川が流れている。本郷遺跡の発見の端となった遺物の出土は，調査地点北東に位置する旧日下川流路から西側で，河川の付け変え工事によって出土したものと考えられる。調査地点南側では，谷地形の様相を呈しており湧水が多く湿田である。発掘調査のなかで，検出された遺物包含層は，調査地点南西部（現日高中学校周辺）から流失したものと考えられる。

遺　物

出土した遺物は，弥生時代後期・古墳時代後期・平安・鎌倉・室町時代に属するものであったが，そのうち弥生時代後期・古墳時代後期のものが量的に多い。遺物は総て細片であり，図示できうるものは少なかった。これについては，遺物の所属する時代順に述べたい。

弥生時代

遺物は総て土器片ばかりである。本来の形状がわかる点数は少なく，包含されていた堆積層の関連かほとんどが磨滅をうけており，調整痕の不明瞭なものが多い。器種の判明した破片は壺・甕であり，そのなかで甕が多かった。

壺　（図6・1～3）

①は口径10.5cmの壺口縁部である。やや内湾ぎみに直立する頸部から口縁部で外反さしている。頸部には外面にタテハケ目調整を施し，口縁端部は横ナデ調整をしている。

②・口径12cmの壺口縁部である。内・外面とも横ナデ調整を施す。③・内湾ぎみに直立する頸部から，やや外反さす口縁部を有する。口径12.8cmを測る。口縁部は横ナデを施す。

甕　（図６・４～６・19・20）

④～⑥・肥厚な口縁部を有する甕である。④は口径15cm，内・外面とも横ナデを施す。⑤・口縁端部を外反ぎみにつまみ上げて仕上げている。口径18.5cm，内外面とも横ナデ調整を施す。⑥・口縁端で外湾する口縁部を有する。口径19cm，口縁端は内・外面とも横ナデ調整をしている。⑲・底部の破片である。胎土には砂粒が多く含まれ，底面には煤が付着している。形状はほとんど丸底に近い。⑳・出土した土器片のなかで，原形に近い形状をとどめていた。胴下半部以下を欠失している。器肉はやや薄く，外面には煤が付着している。また外面の一部に黒斑を有する。内面はヘラ削りの後，ナデ調整を施す。頸部はくの字型に屈折し，内面には稜を有する。口径12.3cm，推定復元高は約20cmである。

⑦～⑱は，口径の求め難い土器口縁部片である。いづれも口縁部の細片であり，本来の形状・器種の区別等については判然としない。同一個体の破片であると考えられるものを除き，それぞれ別個体の一部細片とみられるのを図示した。

弥生時代に属する物としては，以上の如く細片となった土器類であった。遺物整理の過程では，土器片間の接続例もなく，各細片を器種別・個体別に区分することは困難であって，わずかに口縁部破片の存在により個体数が知られる程度である。出土土器は，弥生時代における他の時期の土器片とは混在しておらず，型式学的には一範疇に属するものと考えられる。土器破片のなかで，土器底部の出土が少なく，わずかに⑲の存在があっただけでその他の土器片の底部形状を知ることはできないが，⑳や①・③の形状から本発掘調査によって出土した土器の属する時期は，弥生時代後期後半に位置するものと思われる。なお，この点に関しては遺物の出土した堆積層が二次堆積層であるので，その性格を考慮し今後検討してゆく必要があろう。

古墳時代

古墳時代に関する遺物では，須恵器（甕・杯・高杯等）・土師器高杯片の出土があった。

須恵器

甕　（図７・１～11）

１・外面は，平行タタキ目の上にカキ目調整を加えた後，ナデている。内面には同心円タタキ目が残されており，目は荒く太い。

２・外面は格子様タタキ目が施され，内面は円孤タタキ目が残る。甕胴部片と思われる。

３・甕口縁部の破片である。外面には櫛描文を残す。口縁端部はロクロナデ調整を施す。

４・外面は，平行タタキ目の上を細い板状工具で調整しており，内面には同心円タタキ目が残る。全体的に磨滅が著しい。

５・外面は間隔２㎜の平行タタキ目が施され，内面では同心円タタキ目の上を半スリ消シ調整が残る。

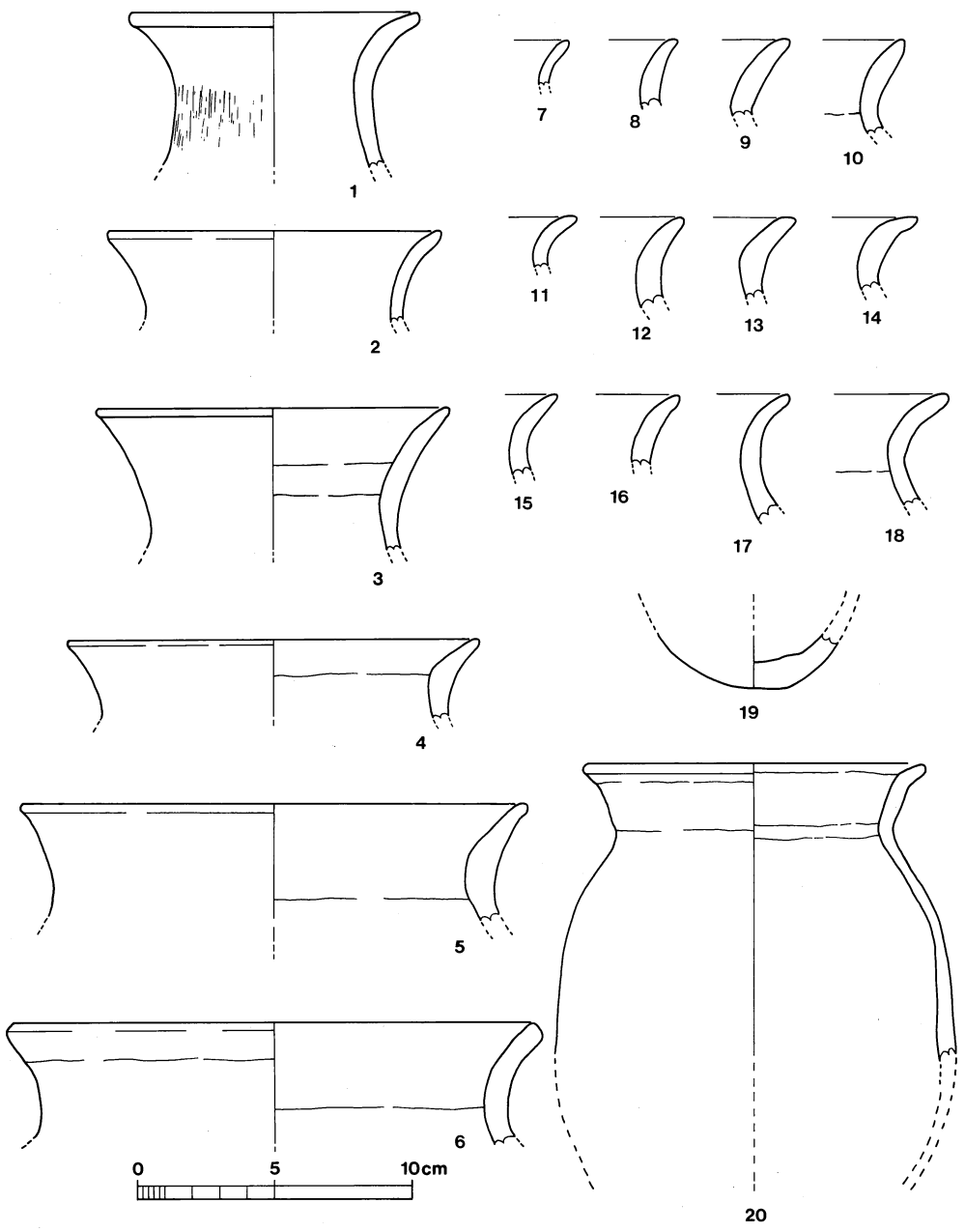


図 6　本郷遺跡出土の弥生土器

6・1・4と同じ調整が外面にみられる。平行タタキ目の上をカキ目調整する。内面には同心円タタキ目となり目は太い。

7・外面は平行タタキ目の上を強いカキ目調整している。カキ目は荒い。内面は，同心円タタキ目の上をナデている。

8・甕上胴部片である。外面は平行タタキ目の上にさらにタタキ目を加えている。内面は間隔の狭い同心円タタキ目が施され，その上をロクロナデ。

9・甕上胴部片である。外面では，間隔の狭い平行タタキ目の上をロクロナデですり消している。内面は目の太い円孤タタキ目の上をロクロナデ。

10・甕下胴部片である。外面では平行タタキ目の上をさらにタタキ目が施され，内面は同心円タタキ目と円孤タタキ目が重復している。

11・外面は間隔の広い平行タタキ目の上をロクロナデですり消している。内面は同心円タタキ目の上を完全にすり消し，その上にロクロナデした痕跡を有する。

杯　（図8・12～14・16）

12・杯蓋である。稜の痕跡のない全体的に丸味をもった蓋であり，天井部に三本の線で構成されるヘラ記号を有する。体部の$\frac{1}{3}$をヘラ削りし，ロクロ回転は右方向であったと考えられる。口径11.8cm・器高3.4㎝を測る。完形品の$\frac{2}{3}$破片である。

13・杯身である。受部のたちあがりは短く，内傾している。天井部の$\frac{1}{3}$をヘラ削りする。体部は丸味をもって仕上げ，口径12.4cm・器高3.2㎝を測る。内面底部は，ロクロナデの上をナデている。

14・杯身であり，体部のおおくを欠失する。口縁端部は尖り気味であり，内傾する。内外面ともロクロナデを施し，口径13.2cmを測る。

16・杯身である。細片であり，口径を求め得ない。半製品の如く，焼成うけた痕跡がなく土器質である。同一個体片と思われる体部破片はきわめて薄く2～3㎜の厚さである。胎土には小砂粒を多く含む。

高杯　（図8・15）

高杯脚部底と思われる。脚の上半・杯等を欠失している。底径9.2㎝を測り，内外面ともロクロナデが施される。

その他，図示できない細片の須恵器片が出土している。いづれも杯の破片であり，口縁端部の違いから個体数を区分できた。その数は，杯蓋3個体分・杯身2個体分であった。また，土師器高杯片の出土もあった。

古墳時代に関する遺物としては，一応上記の物が出土したが，所属する時代の不明のもの

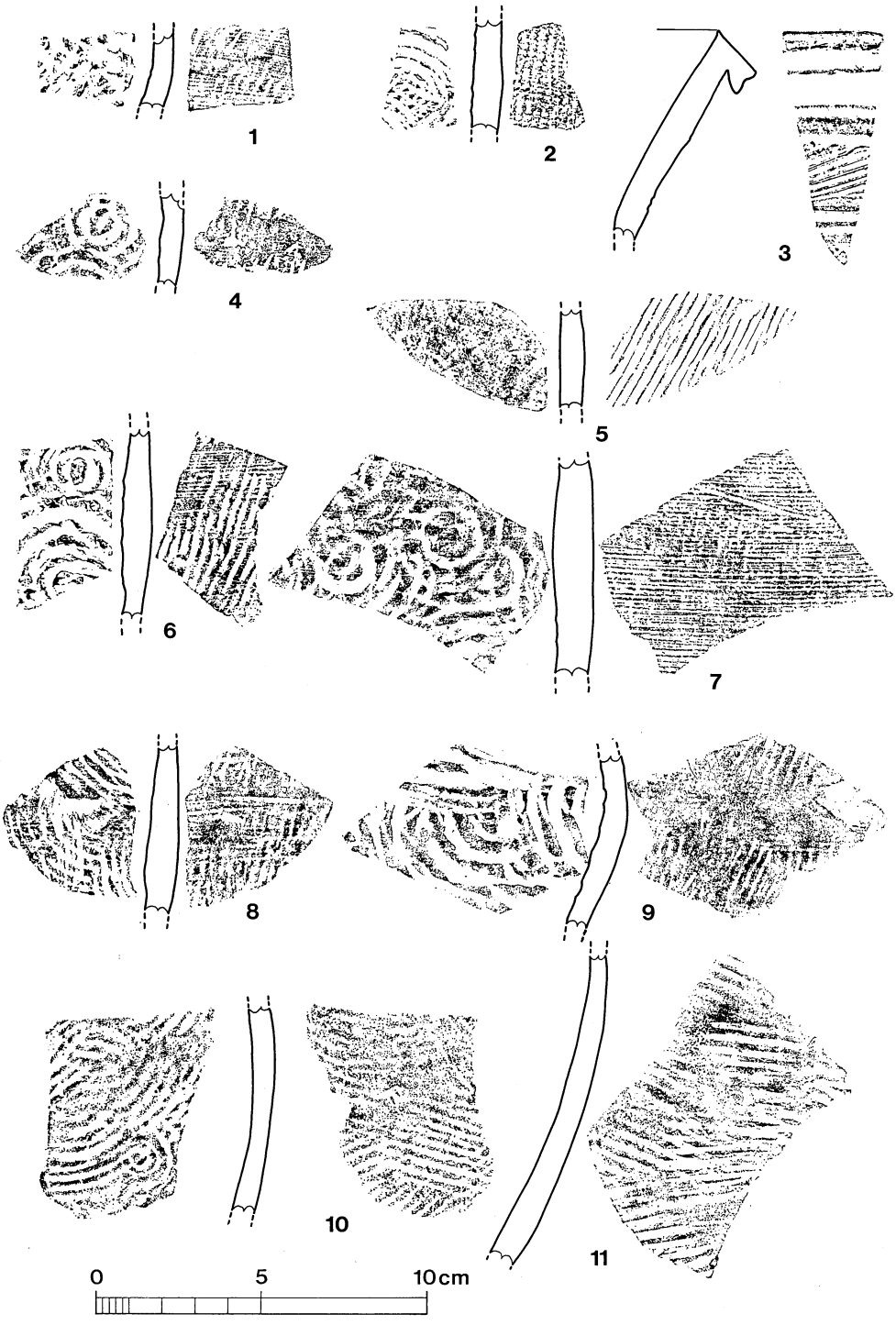


図7　本郷遺跡出土の須恵器

として，17・18・20の出土があった。これらについては，弥生土器片と古墳時代須恵器片の混在した土層からの出土遺物という意味もあって，その他の遺物として取り扱った。

その他の遺物　（図８・17～20）

17・土錘片である。大半を欠失している。焼成は良好であるが，磨滅が激しい。胎土は緻密であり，内外面とも色調は黄赤色である。

18・不明鉄器である。釣り針状の形状をしているが，断面は偏平である。

19・土師質土器で椀底部片である。糸切底であったと思われ，指圧痕が残る。底部端は，指ナデ調整を施す。平安～鎌倉時代に属する物と考えられ，第Ⅳ層から出土した。

20・砂岩製の砥石であるが，割れて一部を欠いている。使用面は石材の一面であったと思われ，他は自然面を有する。使用面には，わずかであるが使用痕が残る。

遺物と出土層位

図示した遺物のなかで，弥生土器１～３・６～20と古墳時代遺物５～７・９～16，それにその他の遺物として17・18・20はいづれも第Ⅴ層から出土した。他は，第Ⅱ層～第Ⅳ層において出土した遺物である。先に述べたが，第Ⅴ層においては，17・18・20を除いて弥生・古墳時代に属すると考えられる遺物の他は出土していない。

第Ⅲ層においては，室町時代に属すると思われる青磁碗底部片（細片）・及び瓦器椀片が出土しているので，第Ⅱ層～第Ⅳ層における遺物の出土は弥生時代～鎌倉・室町時代に属する遺物の混在が激しい。

古墳時代の遺物は，12～16の須恵器の形態からおよそ古墳時代後期・６Ｃ後半～末にその属する時期が求められ，須恵器甕片等もその枠内に属するものと考えられる。これらの遺物を包含していた一次堆積層を推測するならば，古墳時代後期の遺物包含層と弥生時代後期の遺物包含層がそれぞれ考えられ，本発堀調査地点周辺に存在していたものであろうと考えられる。

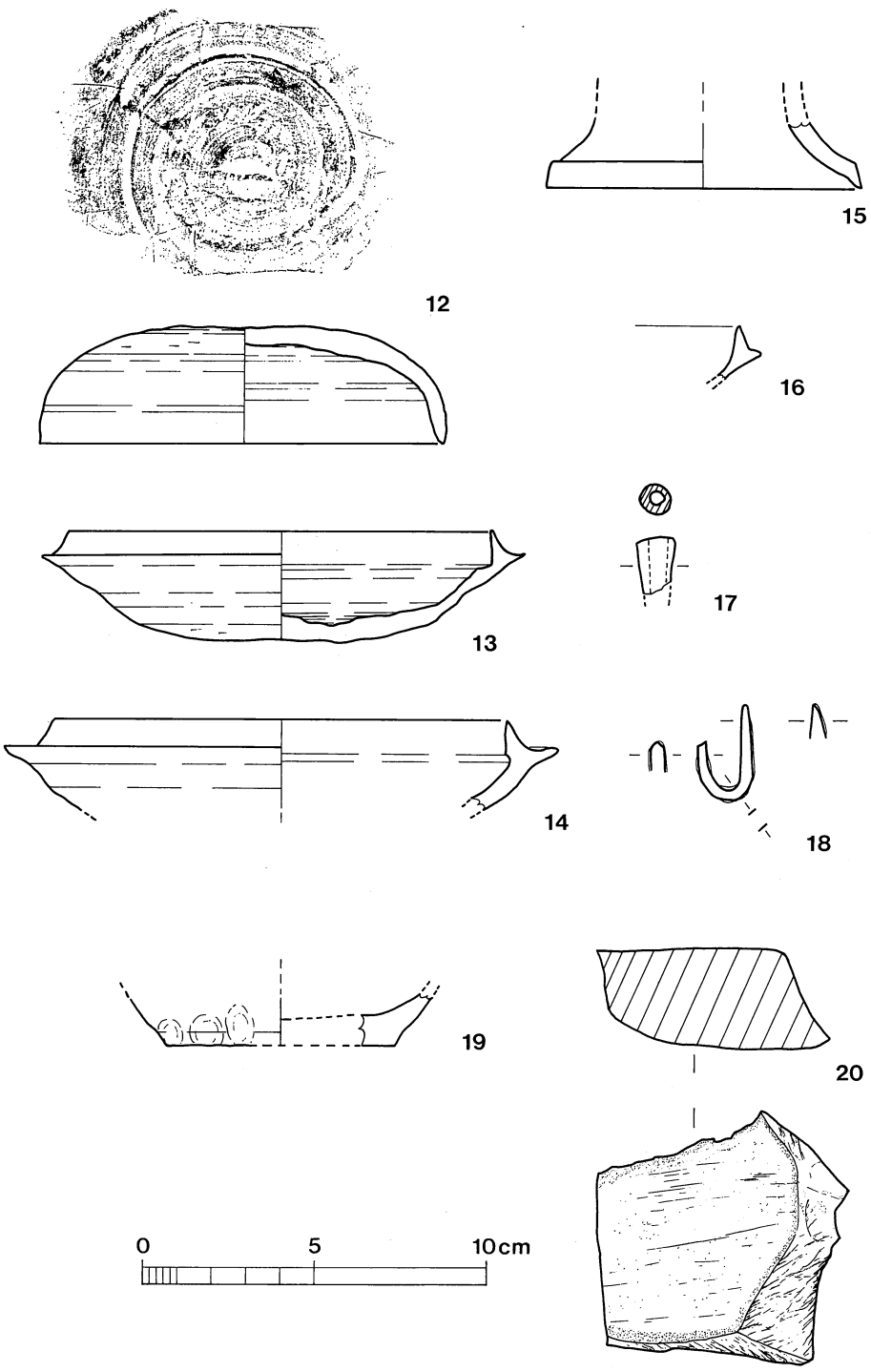


図 8　本郷遺跡出土の遺物

V 小 結

日下川河川改修工事に伴う発掘調査として実施した今時の調査においては，小規模な発掘面積ながらも，本郷吉池において遺物包含層が存在することが判明した。

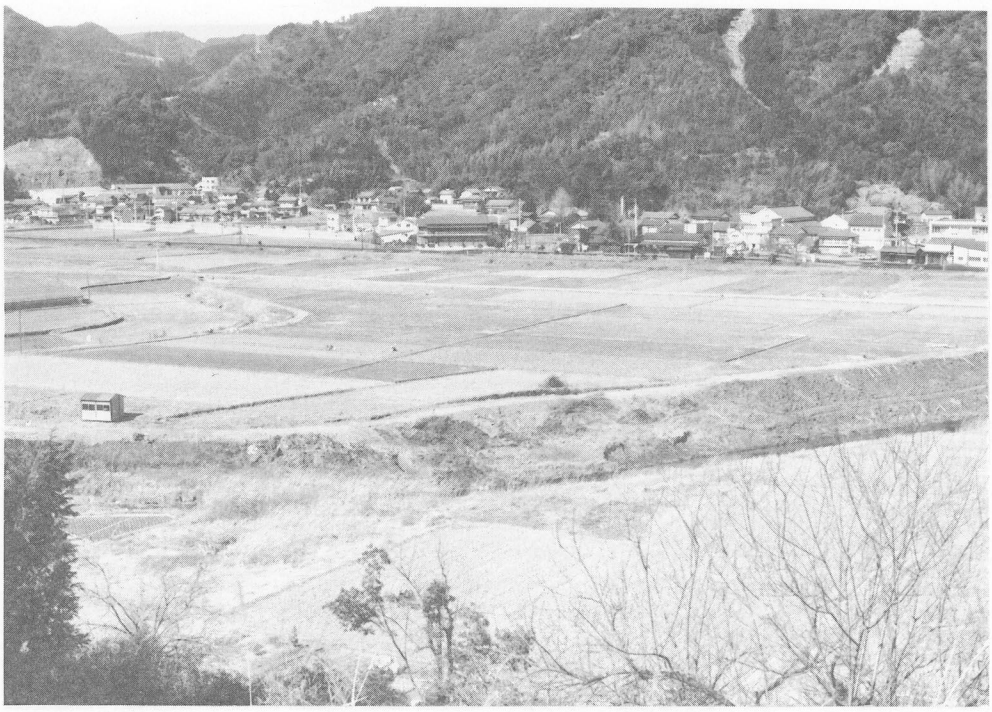
この遺物包含層は，本来の遺跡である本郷遺跡の一部から流失再堆積したものと考えられ，これまで土器等の出土によって地点的にしか把握されなかった遺跡の所在範囲について，手掛りを得ることができた。

具体的な本郷遺跡の所在地については，なお今後の調査に期待したいが，おそらく本発掘調査地点周辺に一次堆積の遺物包含層と遺構の存在があるのではないかと考えられる。調査によって出土した土器等によれば，遺物の所属時期は弥生時代後期後半と古墳時代後期（６Ｃ後半～末）の二時期に大別され，おそらく調査地点周辺にこの該当時期において小規模な集落が営なまれたものと推測される。

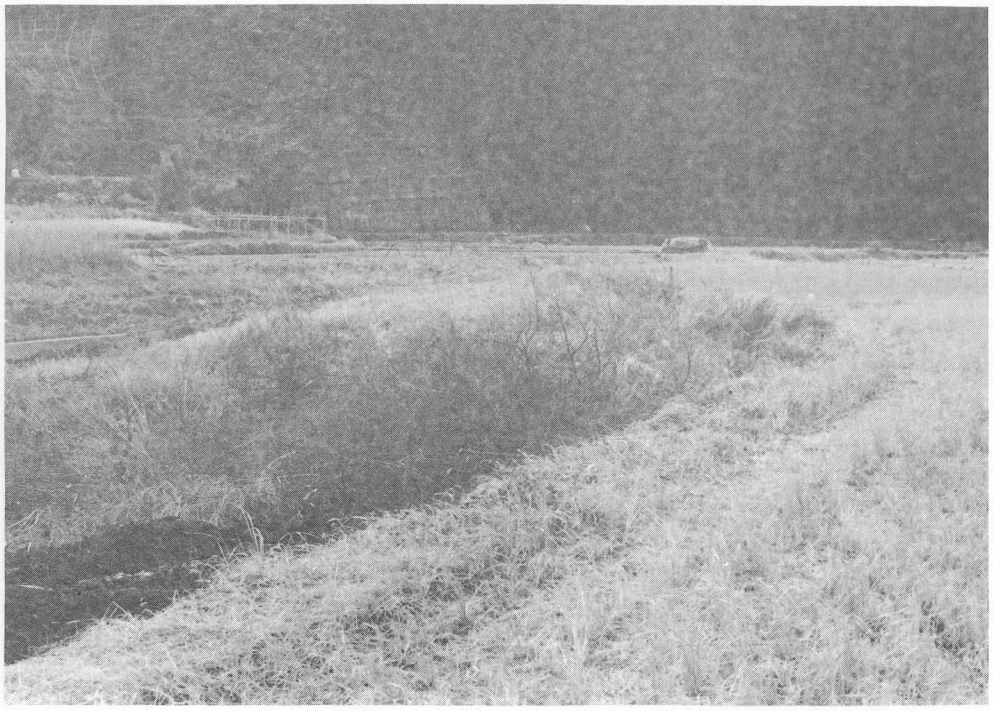
従来，本郷遺跡については弥生土器等の出土により弥生時代の遺物包含層の存在が予想されたが，今回の調査によって新たに古墳時代後期の遺物の所在が確認された。これまで，日高村内においてはこの時期の遺跡は確認されておらず，古墳時代に関する新しい資料の追加をみた。今後，こうした資料をもとに弥生・古墳時代にかかわる遺構の所在を確認してゆくことが課題となろう。

図

版

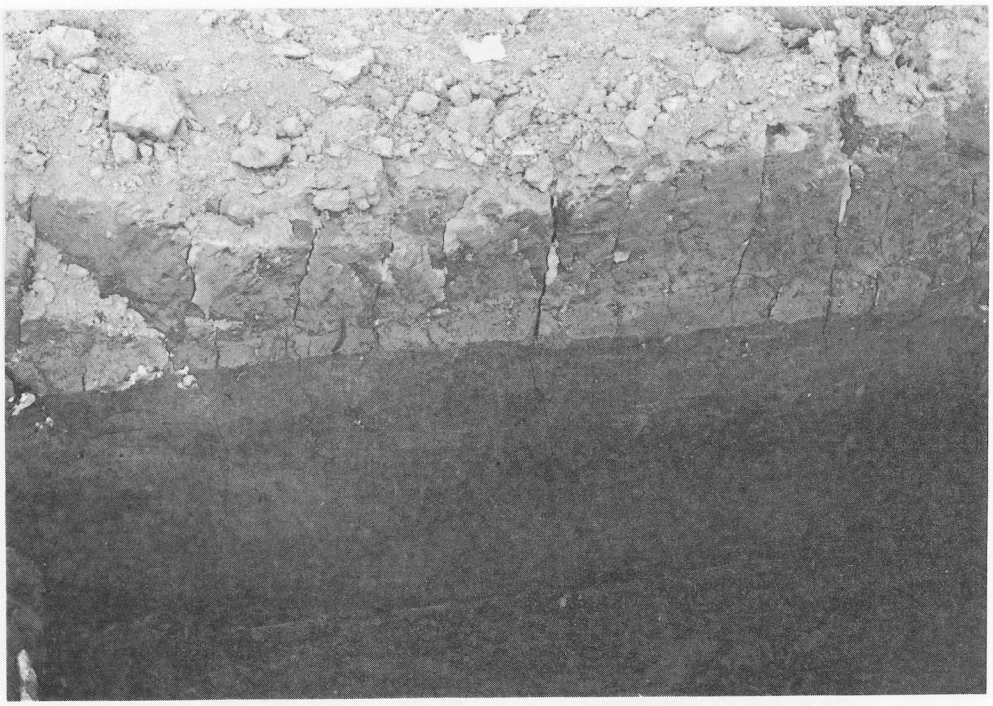


日下経塚調査地点遠景（南東から）



調査地点・調査前風景（北から）

第１トレンチ設定状況（北から）



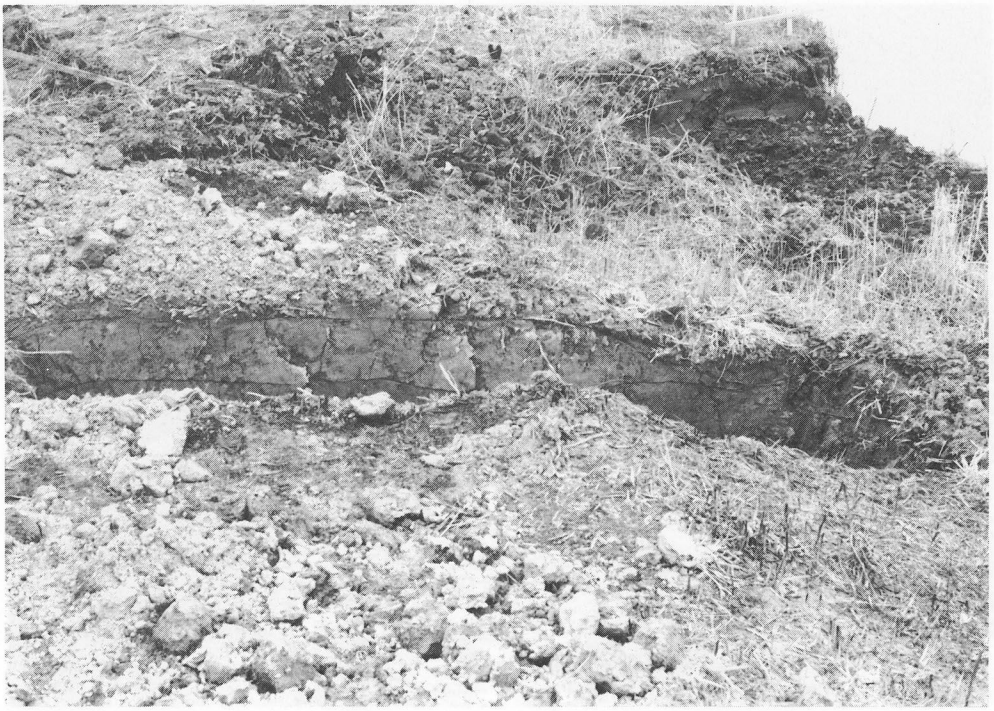
第１トレンチ内土層序（東壁）

第２トレンチ設定状況（西から）

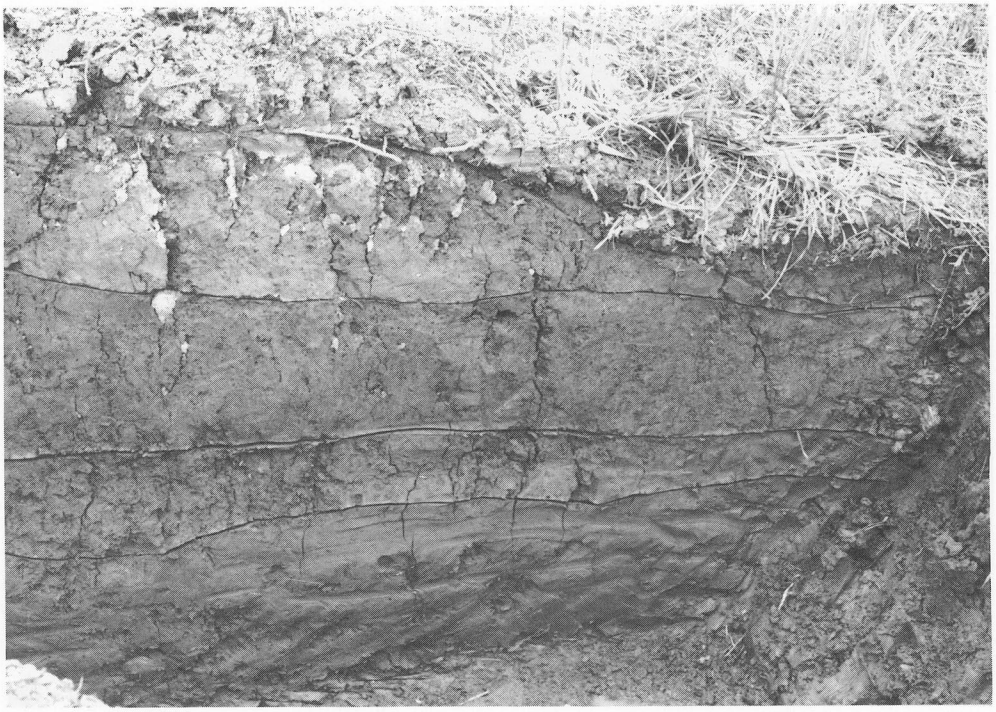
第2トレンチ層序

第 3 トレンチ設定前（西から）

第 3 トレンチ設定状況



第4トレンチ設定状況（南から）

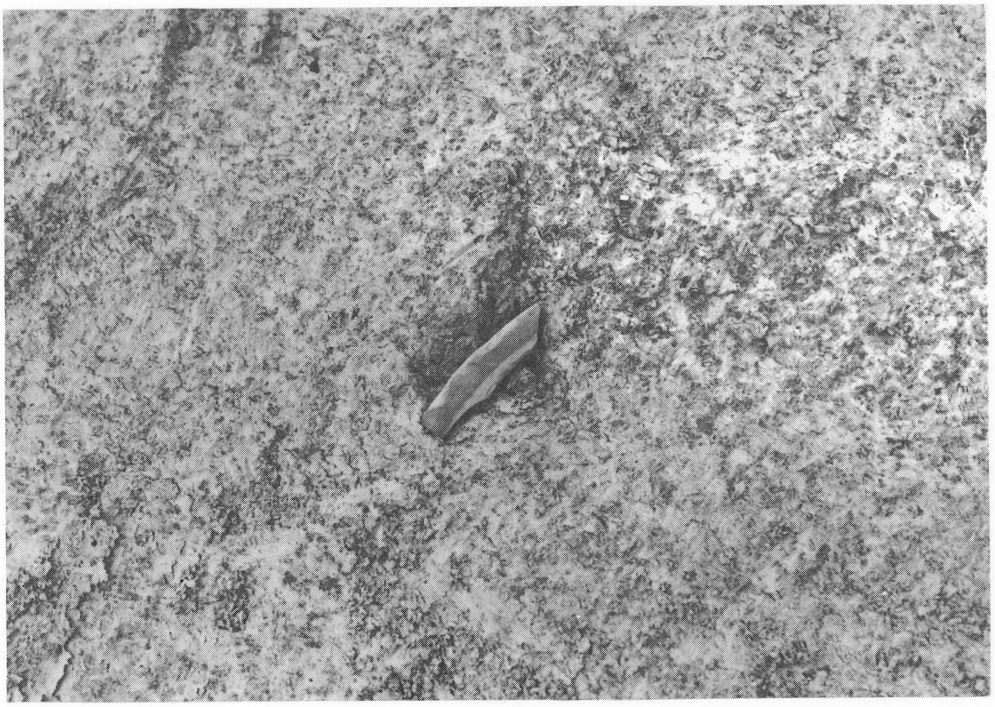


第4トレンチ内土層序（北壁）

本郷遺跡　調査風景

遺物出土状況（東から）

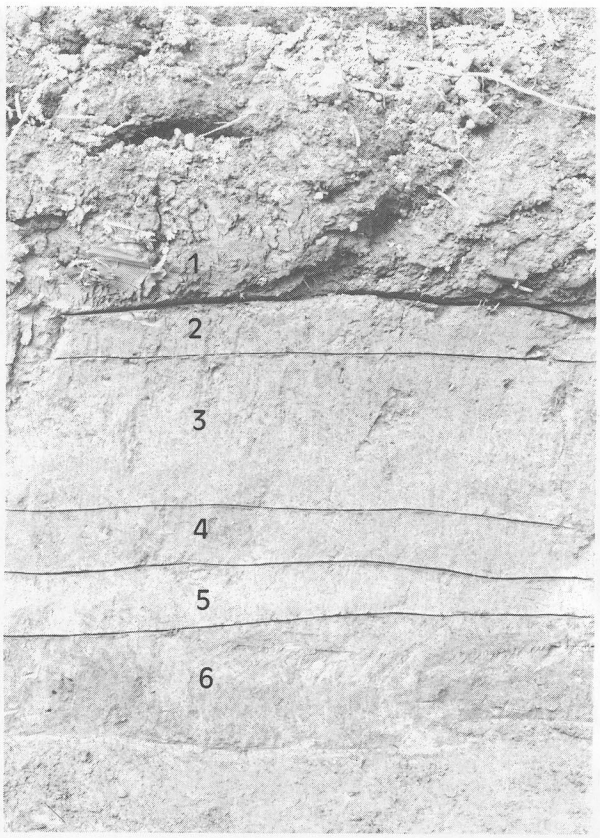
遺物出土状態（青磁）



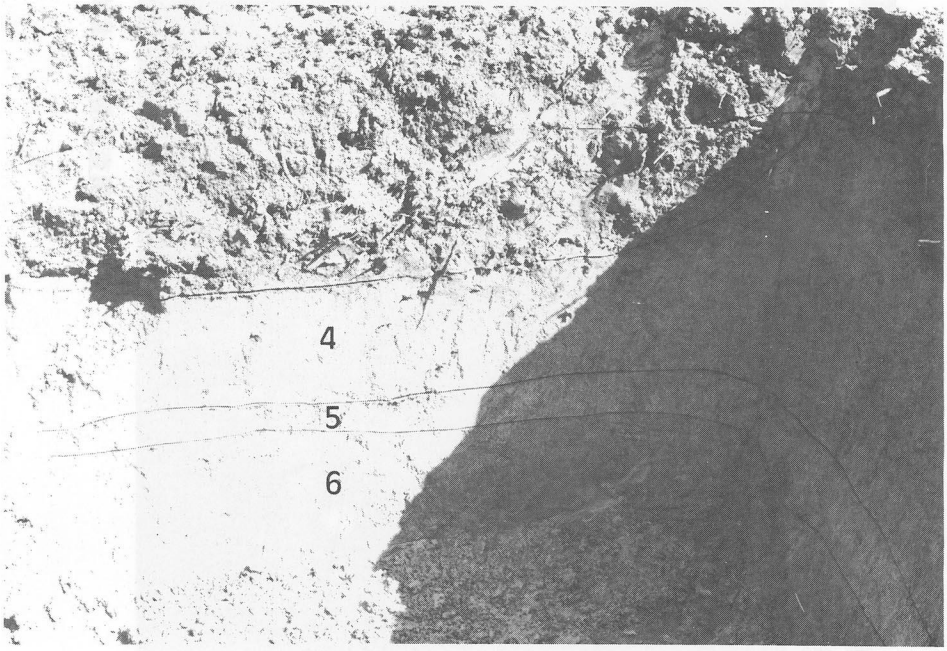
遺物出土状態（須恵器）

調査区北側の状況（南より）

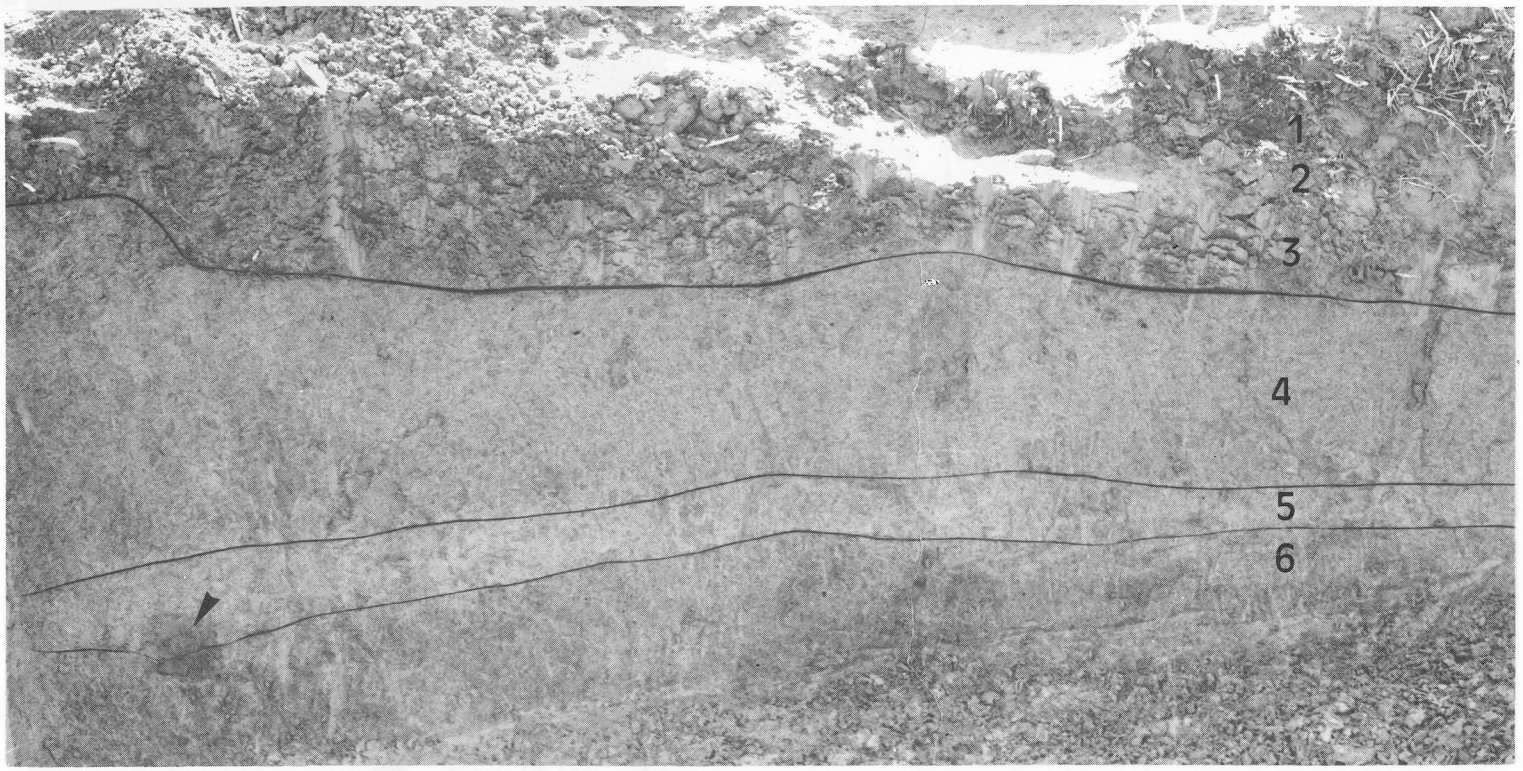
調査風景



調査区層序（西壁）



（東　壁）



調査区層序と遺物（弥生土器）出土状況（南壁）

出土遺物（弥生土器）